



アルダハンへの峠道に見られたヤイラ

ヴィンからシャヴシャットを通り、ヤイラ（夏营地）の連なる山脈を越え、アルダハンを経由してこの町に到りました。これが最もエキサイティングなコースといえましょう。

もっとも、優れてエキサイティングというのは、不便の同義語でもあるのです。アルトヴィンからカルスへ行くには、二度の乗り換えを余儀なくされます（現在はあるいは直行があるかも知れませんが）。まずシャヴシャット、そしてアルダハン。いずれもミニバスのドルムシュです。客がいつぱいになるまで、ある程度待たされることを覚悟しておかなければなりません。

さてアルトヴィンを出たバスは川沿いの道を走り、前日に来たドリシャネ（グルジア古教会）への上り口を左に見て、次第に高度を上げていきます。小一時間で着いたシャヴシャットは、中世グルジアの中心都市の一つ、緑に包まれた牧歌的な風情を湛えていました。この時は乗り換えたのですが、翌年には町を散策し、周辺の眺望を楽しんだあと、古城遺跡を尋ねました。もっとも物好きには、上には上がいるものです。私と同年のK氏は、後にこの町の外れに数ヶ月の滞在を試み、これまた同い年の女性の画家は、K氏を頼ってこの町を訪ねて二泊し

ました。

シャヴシャットを出たドルムシュは、まもなく急坂にさしかかります。遠望がますます開けて胸が躍りました。英国の案内書に、チロル周辺のアルプスを思わせる風景とありますが、決してオーバーな表現ではないでしょう。

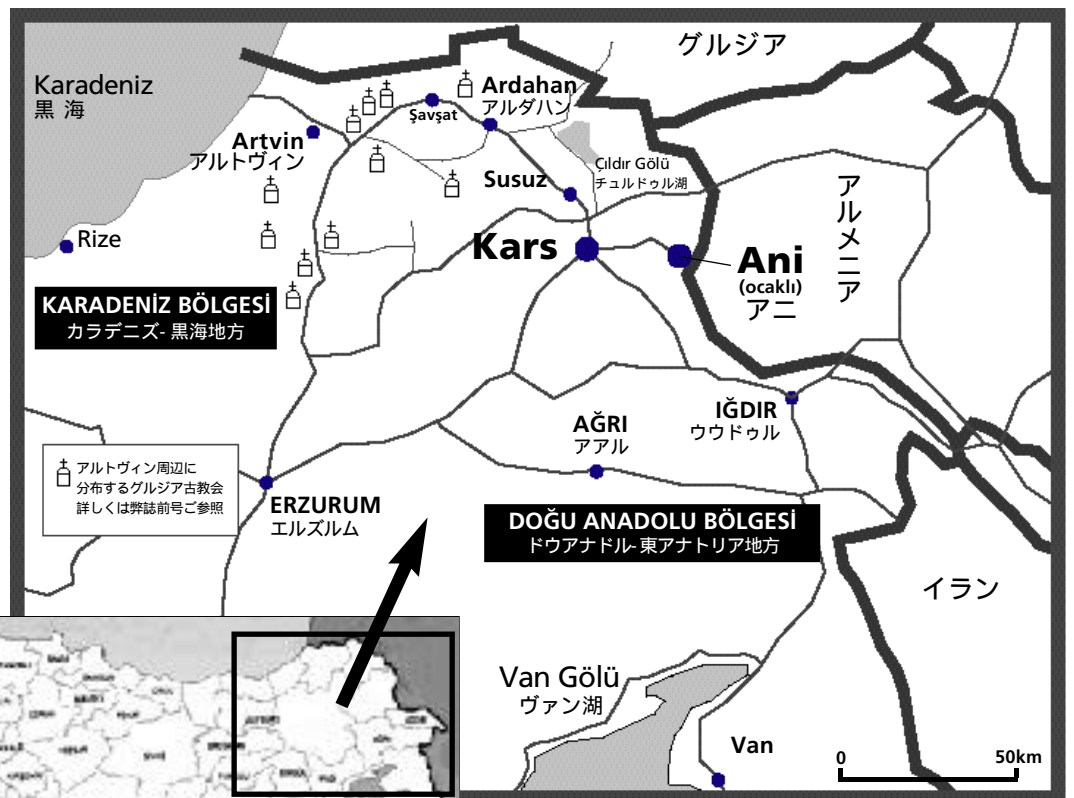
ただ残念、バスが違っていました。急坂にかかってまもなく、エンジンの音が一段と大きくなってきたのです。喘ぎ喘ぎという表現がぴったりの難行苦行、いやでも私は前途の不安を感じ始めました。外の景色はますます山岳地帯の趣を呈してきます。緑が大きな山肌いつぱいに広がり、背の高い針葉樹がぼつぼつとそそり立つ…。

やがてなだらかな湿原にさしかかり、左側にヤイラが見えてきました。遊牧民が家畜を連れて夏を過ごす場所、標高が高いせいで、もうここには蚊や蠅はいません。かねて話していたヤイラを初めて実際に見て、私は少なからず興奮を覚えました。

するとその時、ついにエンジンがオーバーヒートして、止まってしまったのです。写真を撮るには絶好のタイミングでの停止でした。しかし流れに走っては水を汲んできて、冷却に大重の運転手を見ていると、少々心細くなったことは否め

ません。もう峠は越えていたのでしょ
行く手の展望が開けていました。はるか
かなたの町がアルダハンだと知りました。
約三十分後、運転手たちの努力の甲斐
あって、エンジンは何とか快音を立
めました。あと下りと分かっていたので
これでやれやれ。遊牧民の子供たちの振
る手に送られて出発、一気に坂を下って
二十分ほどでアルダハンの町に入りました。
アルダハン、これも中世、いや古代か
らのこの地方の中心都市、そして今世紀
の初めまでロシア領だったところです。
でも今はめぼしい建物もなく、寒々しく
平板な印象の町でした。ただ丘の上の城
郭は目を引きます。ことに城壁は延々と
連なっていて、往時の繁栄を偲ばせまし
た。黒い石造りが、規模は小さいながら
に、南東トルコのディヤルバクルの大城
壁を思い出させました。
この辺はもう大きな黒海山脈を越えた
ところなので、海岸部とは風情がすつ
かり変わってきました。海岸部の湿潤さは
もう味わえません。狭く薄汚れたオトガ
ルでかなりの時間待たされた後、カルス
まで一〇〇キロあまりの道に出ました。
途中大きな山坂もなく、今格別の記憶も
よみがえりませんが、大空にすばらしい
虹が半円を描いたのが印象的でした。

やがて暗くなった道のかたわらに、ス
ズスの地名を見出しました。七年前のこ
と、アンカラのオトガルで出会った紳士
が、この町の教員養成校の校長と知って
あと彼を尋ねてこの町へ来、学校を見学
したことを思い出しました。その学校の



トルコ・北東地方地図



トルコ全国地図

名前はカイズム・カラベキル、つまり第一次大戦時の東部戦線で活躍した將軍の名前です。アタテュルク革命の初期に全国に設けられた、教員養成施設の一つと後で知りました。

カルス 民族の交錯の中で

たそがれの中、カルスの新しいオトガリに着きました。カルスは一七〇〇メートル余の高原に位置する都市です。トルコ全体が、諸々の民族の往来の中で形作られた国ですが、カルスはことにトルコ近世史の中で、そうした思いを募らせる町です。トルコの歴史に関心の向きは、一度ぜひ足を運んでください。

町の中心の丘の上に聳える古城は、圧倒的な風格でここが古来の中心都市だったことを印象付けます。現場の案内板には、トルコ族の侵入以降の歴史しか書いてありませんが、明らかに中世アルメニアの残照を感じさせます。もっと古代のウラルトウや、のちのビザンチンや、そしてトルコ族が入って以降の様式も受け継がれていることでしょう。坂を登ると景色が開けて、歴史を追懐するには絶好の場所です。

ただうつかりあまりに奥へ入って、カメラを四方に向けない方がよろしいでしょう。九五年の夏私たちは、遠くから近づいてきた軍靴の三人に、いつしか前後を固められ、丁重にただし威圧的に城の外へ誘導されてしまいました。

カルスはあとで述べる近世の歴史から、ロシアの風情を色濃く残しているといわれています。私はソ連時代のモスクワを垣間見ただけですから、その可否を判断することはできませんが、ただ何となく子供のときに絵本などで親しんだ、旧満州（現在中国東北地方）の都市風景を思い出しました。英国の案内書は、ウィーンがサンクトペテルブルグの優雅な建築を、埃っぽい東方のアジアに持ってきたみたい、などといっていますがどんなものでしょう。

いずれにしても、いわば最果ての町という印象は拭えません。他の東部の町も似たり寄ったりですが、格別の産業があるわけでもなく、皆が細々と糊口を凌いでいるという感じがします。それでもって私たち旅行者にとって少々こたえるのは、宿泊設備がかなりお粗末なことです。もっともそれまた旅心さえ旺盛ならば、気にならないのかもしれませんが。最近この町を訪ねた前述の工画家などは、格別の不満はなかったようです。あるいは

徐々に改善が進んでいるのかもしれませんが。

ともあれ初めて訪れた八八年に、やりきれぬ思いをした私たちは、九五年の訪問の際には、アルトヴィンのカラハンホテルから、彼らの一族が経営している郊外のモーターテルを、予備として紹介してもらっていました。一応最初は、アンカラで予約していた都心のホテルを訪ねたのですが、やはりかなりのものだったので、結局その郊外のモーターテルに移ることにしました。

このモーターテル、名前をアニハンといいます。エルズルムへ向かう国道沿いの畑の中にあってだだっ広く、兵舎を思わせます。造りもざつとしていますが、新しいのだけはとりえでした。国道に近い上に空港から近く、広野の真ん中という最果て感が味わえて、私は気に入っています。

ここでカルスを含む東部トルコ一帯を版図にしていた、アルメニアの歴史について、簡単に触れておきましょう。

* 紀元前九世紀、ヴァン湖を中心とする地方一帯に、アルメニア人の祖といわれる 古代ウラルトウ王朝が創立され、前六世紀初めまで続く。

* その後前六世紀半ば、ペルシャ人（パルテ

イア国）の支配下に入り、前四世紀アレキサンダー大王のよって征服される。

* 前二世紀初め、アルメニア国家が出来て分立するが、前一世紀ティグラーネス二世が統一国家を建設。この王国の最大版図は、北はカスピ海、黒海沿岸から南はメソポタミア北部、地中海沿岸に及んだ。

* 四世紀初め、国王一家はキリスト教に改宗。これはローマに先立つもので、世界最初のキリスト教国といわれる所以である。

* 王国は五世紀頃まで、ビザンチンとペルシアの緩衝地帯として続いたが、その後両国の



チュルドウル湖の湖畔にて。



トルコとアルメニアの国境を流れるアルパチャウ（アルパ川）

争いに巻き込まれて分裂し、さらに七世紀以降は、アラブ人の侵攻もあって苦難が続く。
 * 九世紀から十世紀初め、バグラティド家が勃興し、やがてその支族バグラトゥニ家が王朝を樹立して、最初カルスに、後アニを都として、約二百年間にわたって繁栄を続けた。

現在の遺跡の多くがこの時代のもの。

* 十一世紀、ビザンチンが勢力を回復して侵攻を受け、さらに新興のトルコ族の圧迫により衰退、のちモンゴル、ティムールの侵攻もあり、サファヴィ朝ペルシャの支配も受けた。なおこの間一部のアルメニア人は、現在のトルコ地中海東部のキリキア地方に移って国を建て、十字軍の尖兵としての役割を果たしたこともある。

* 十五世紀、オスマン・トルコの支配下に入る。

* 十八世紀以降、トルコ、ロシア、ペルシャの三民族の勢力争いに巻き込まれる。

* 十九世紀初め、南コーカサスに属する西部一帯はロシアの植民地となる。

* 二〇世紀に入り、第一次大戦では、当初帝政ロシアとトルコの主戦場となり、この間一九一七年のロシア革命、ソ連邦樹立を機に独立を宣言した。

* 独立アルメニアは、一時トルコとの戦闘の主体となったが、ソ連が対トルコ和平の方針を打ち出したため、一九二〇年、両国に分割され独立を失った。トルコの敗戦後、種々の国際的駆け引きが行われたが、ついに独立を回復できず。

* 一九九一年ソ連崩壊により独立を達成。

カルスは一八七八年のベルリン条約で、アルダハン、バツミ両県と共にロシア

両に編入されていましたが、一九一七年のソ連の各国との講話条約、最終的には一九二一年のトルコと、ソ連（その頃アルメニアなどコーカサス三国を支配下に置いていた）とのカルス協定の結果、トルコに返ってきました。このとき確定された国境線が、ソ連崩壊以後のアルメニア共和国の現在に引き継がれています。なおバツミは一九二〇年のモスクワ協定でソ連（グルジア）に編入されています。

一九二一年の最終交渉の段階でアルメニア側は、民族のいわばシンボルでもある中世の古都アニを、アルメニア側に編入するよう粘ったようですが、ケマル・パシャは頑として、すでに大筋で合意のアルパ川（アラクス河）の線を譲らなかったそうです。この川のことはあとアニのところでもまた触れましょう。

さて私はこの町で、今思い出してもふと不思議な思いにとらわれる、ある人物に会いました。九五年のことですが、モーターの窓から突如日本語が聞こえてきたのです。近づいて挨拶を交わすと、これはまた流暢な日本語、彼は東京の大使館に駐在していたと語りました。今カルス県のかんりの地位にいたのでしょ、ホテルのマネージャーは、ずいぶんと氣を使っていたようです。



アニ遺跡の城門

翌年再訪のとき彼は入院中でした。普通は訪ねることもない病院の内部を見てみよう、という多少の物好き心も手伝って、見舞うことにしました。かなりの大病院の奥まった一角、彼はベッドに横たわりながら、例によって大きな声を出していました。どこが悪いのかももう一つはつきりせず、入院の必要を感じさせませんでした。が、「ゲチミシ・オルスン（お大事に）」を言っただけでした。近々に転勤があるような話で、もう会うこともなからうと考えていました。

なんとその彼が、私たちの帰途の空港に現れたのです。つい二、三日前までは間違いない病院にいたはず。驚いている私たちに向かって、相変わらずの大声で話しかけてきます。「日本ではどこに住んでいますか」「はい、鎌倉です」。

ふと思いました。もしや彼は私の動向をチェックしていた？ 私の連れの女性二人は、さかんに「そうだ、そうだ」と言っただけで、私をおどすのです。でも私は思いました。「いや、そんなことはない。きっと彼は日本語を話したかっただけだ」と。それからあと、もちろん何のこともありません。でもあの大声の流暢な日本語は、最果ての町の不思議な思い出です。ではこの辺で、そろそろカルス観光の目玉、アニ遺跡を訪ねてみましょう。

アニ 究極の遺跡

ひとむかし以上も前、「究極の」という言葉がはやったことがあります。その頃つまり一九八八年秋、人に勧められて初めてアニを訪ね

た私は、帰国して綴った文章に、この遺跡に「究極の」という形容詞を冠したのです。それは私の率直な感想でした。ちなみに、それまでもっとも印象深かった遺跡はと問われれば、他日ご紹介する地中海岸に近い山上の遺跡、テルメツソスを挙げていました。



アニ遺跡
10世紀のカテドラル



アニ遺跡。13世紀の聖グレゴリー教会

の登録と警察の許可が必要です。そして最初八八年当時は、カメラの持ち込みが禁止されていました。隣りはまだソ連だった時代、九月というのに氷雨の降る寒い日の思い出が、この厳しい警戒の記憶と共に蘇ってきます。

九五年、九六年には、うんと緩やかになっていました。それもどちらかというと、九五年の方がより緩やかだったようです。その時々で情勢で一定していかないでしょう。もちろん隣りはもうアルメニア共和国に変わっていました。いずれにしてもアニが国境の町ということ、常に多かれ少なかれ緊張を覚えることはたしかです。

カルスからアニまでは、少々凸凹の六〇キロ、麦畑と荒野が交互に展開する、何の変哲もない田舎道です。それだけにその道のかなたに、聳え立つ城壁を望んだときには、一種言い知れぬ感慨を催します。

アニは、歴史のところで述べたように、バグラトゥニ家のアショト三世によって、アルメニア王国の首都と定められたところです。九八九年から一〇二〇年まで在位したガギグ一世の時代が、中世アルメニアの最盛期といわれています。アルメニアの商人たちは、東はインドから西は地中海沿岸の諸国までその活動範囲

を広げ、各地との交易によるおびただしい財貨が、アニに持ち込まれたそうです。

その後十一世紀末、トルコ族に征服されました。今残っている建物のほとんどは、中世アルメニアのものですが、セルジウクトルコの遺跡として、モスクが一つ残っているのが特徴的です。トルコの支配下でも人々は生活を営んでいたのでしょう。都市機能が完全に崩壊したのは、十三世紀に侵攻してきたモンゴルのせいだそうです。

さて専門的な立場で広く世界を見渡せば、もっともつと壮大な都市遺跡は数多くあることでしょうが、私の見聞した限りで、アニは最も壮大でかつ歴史の哀歓をそそる遺跡のように思われます。学者の推定によれば、中世の昔、ここに十万人の人々が住んでいたそうです。イスタンブールは別格ですが、当時のヨーロッパの都市と比較して、規模において決して引けを取らないはずです。また見方を変えると、キリスト教世界での最も東端の大都市でもあったのです。

十字架をかたどった紋章をいただく城門を入ると、広漠たる都市遺跡が一望されます。もちろんほとんどは原野に近く、ところどころに教会跡などの大きな建物だけが残っていることで、都市遺跡と知るわけです。

門から時計回りに主な建物を拾うと、縦に真つ二つに割れたレディメル教会、多少保存のよい聖グレゴリー教会、美しく残された三聖人修道院などが、中世アルメニアの繁栄を偲ばせます。フレスコ画の美しく残っている建物もあります。そして目を引くのが、前述したセルジウク時代のモスクです。角型の煙突を思わせるミナレ（尖塔）には登ることもできます。九六年には数名の兵士が駐屯していて、建物の中から銃身を対岸に向けて構えていました。

この遺跡の印象を写真に収めることは、たいへんに難しい。建物があまりに点状に入れているので、いくつかの建物を一枚に入れようとすると、かなりの遠景にしなければならず、今度はどうしても迫力が伝わりません。ともあれ筆もカメラも、こここの広大で蕭条たる風色を伝えることはできません。現場こそがすべてです。

この場所を優れて印象的にするものの一つとして、アルバ渓谷の鋭い風情を挙げなければなりません。深く挟まれた谷の底を蒼い水がゆつくりと流れています。これが今世紀の初めから、トルコとソ連またはアルメニアを分けて入る国境線です。谷のかなたに見える低い建物は、アルメニアの兵舎だそうです。前に書いたように、一九二一年の最終領土交渉で、



アルメニアはこの往年の栄光の都の地の領有を、とりわけ強く主張したそうですが、その事実を偲ばせる光景です。

この渓谷にかかっている古橋にも、また格別の趣があります。もちろん今は途中が崩れてきれてしまっている橋です。およそこの橋ほど「断橋」という言葉を感じさせる橋はありません。私はいつもこの橋を見下ろして感慨に耽ります。近い将来、またきつとこの「究極の遺跡」を訪ねることでしょう。

アニ遺跡
11世紀のレディメル教会



アニ遺跡。10世紀の城壁

おわりに一言

さて少し説教めきますが、このようなすばらしい遺跡を持つトルコは、その保全を図ると同時に、大いに観光資源として利用してもいいはずですよ。八八年にはまったくなかったホテルやレストランが、九五年には遺跡のすぐそばにお目見えしていました。

それはよいとして、アニハンモテルのちらしによれば、九〇年には四万人もいた観光客が、九五年にはわずかに二千人に激減したのだそうです。危険がないとはいえませんが、単に「東部」というだけで、やみくもに危険視する必要はありません。

また周知の通り、トルコとアルメニアの間には、十九世紀末からの悲しい歴史が横たわっています。私たち第三国の、しかも素人がその真相やら是非を云々することはできませんが、世界的に喧伝された事柄だけに、まったく知らぬ存ぜぬということとは、かえって不誠実なように思われます。

第一次世界大戦後に、アメリカのウィルソン大統領が提唱した線引きは、セーブル条約で消えてしまいました。トルコ革命、新生トルコの建設の影に泣いた人々がいることなど、東部トルコを旅す

る人は、一応の知識として念頭に置いておくことが望ましいでしょう。

詳らかではありませんが、最近の両国関係は一応改善の傾向にあるそうです。私が現役でいた八〇年代前半の激しいテロ活動が、最近はずっと報じられないことは、ほんとうに喜ばしい限りです。
(「トルコ奥の細道／クゼイドウの部」おわり)



■筆者のプロフィール

赤松順太（あかまつじゅんた）

昭和6年、愛媛県宇和島市生まれ。

京都大学法学部卒業。

三井物産在職中の昭和56年より

4年間トルコに勤務。退職後も数回渡航し、

長期の滞在経験あり。

<著書>『新トルコ風土記』

『アナトリア旅情』（写真集）

『トルコ生活紀行ートルコで日本を考えるー』

その他雑誌等に寄稿多数。